

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 7 日現在

機関番号：37502

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K13752

研究課題名（和文）精神保健福祉における地域ケア体制の構築のための日仏比較研究

研究課題名（英文）Comparative study between Japan and France for building a community care system in mental health and welfare

研究代表者

池田 真典（Ikeda, Masanori）

別府大学・文学部・准教授

研究者番号：10803471

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：当研究では精神保健福祉における地域ケア体制の現状と課題について、日仏の研究者、精神科医らとともに、比較研究を行った。申請者は法学者の永野仁美教授、精神科医の三脇康生教授、仏文学者の野崎夏生らと共同で、ドゥリオンの著書『人間の精神医学のための闘い』の翻訳作業を行い、晃洋書房から2022年度に出版した。

同年9月にはフランスの研究者ピエール・ドゥリオンを招聘し、9月9日に京都（京都大学）、11日に東京（上智大学）でシンポジウムを開催した。2023年6月にもフランスでの現地調査を行い、両国の精神保健福祉の課題を検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究を通じて、図書2冊、論文4本（うち1本は2023年7月掲載予定）などが成果としてあげられる。2022年9月にピエール・ドゥリオンを招聘し、シンポジウムを開催した。とくに、京都大学では現役の大学院生、教員らと質疑をする時間もあり、ドゥリオンの実践の意義、それを支える思想について内容を深めることができた。来日時での質疑、その後の対話を通じ、申請者は転移の概念に着目した論文を執筆した。今回の研究を通じて、日仏で新たな研究者との人脈を形成することができ、従来の精神分析の理論を転移の概念を様々な角度から読み直し、施設における実践につなげるという研究の視座が生まれた。

研究成果の概要（英文）：In this study, I conducted a comparative study with Japanese and French researchers and psychiatrists on the current status and issues of community care systems in mental health and welfare. I collected Japanese and French papers and invited French researcher Pierre Delion in September 2022.

My co-researchers and I held a symposium in Kyoto (Kyoto University) on September 9th and Tokyo (Sophia University) on the 11th, and also conducted field research in France in June 2023.

I collaborated with legal scholar Professor Hitomi Nagano, psychiatrist Professor Yasuo Miwaki, and French literary scholar Natsuo Nozaki to publish Delion's book 《Mon combat pour une psychiatrie humaine》 (Albin Michel, 2016) was translated and published by Koyo Shobo in 2022.

研究分野：精神保健福祉学

キーワード：精神保健福祉学 精神病理学 社会福祉思想 地域福祉 医療福祉 フランス 地域生活支援

## 様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

2004年以降、我が国では精神保健医療福祉改革で退院促進と地域移行の仕組みが構築されつつある。さらに、近年では地域包括ケアシステムのもとで、障害の有無を問わず、インフォーマルな支援も取り入れた支援体制の在り方も模索されている。しかし、実際のところ、病床数も漸減にとどまる中、医療と福祉の連携の難しさも浮き彫りになっている。

申請者は日仏の精神保健福祉に関する比較研究を行う中で、地域医療型のフランスの現場を視察し、日仏の研究者と活発に意見交換を行ってきた。

研究では精神障害者の社会統合を推進する日仏の制度構築について、書籍 (Marie-Aline Bloch, *Coordination et parcours*, DUNOD, 2014 など)、新聞、雑誌をはじめとしたフォーマルな媒体、家族会の協会誌などのインフォーマルな資料も参照し文献研究を行い、パリとその近郊の現地調査も行う。

フランスの精神科医の Pierre Delion (ピエール・ドゥリオン、リール第2大学名誉教授) の『人間の精神医学のための闘い』を翻訳出版し、同氏を招する計画である。東京 (上智大学) 京都 (京都大学) にて研究者を交えたシンポジウムを開催し、両国の制度の現状と課題について意見交換し、今後の研究成果の公表に努める。

### 2. 研究の目的

本研究では日仏の精神障害者の地域ケア体制の構築をめぐる現状と課題を、文献研究、現地調査、研究者招聘による意見交換を通じて明らかにし、精神障害者の社会統合に向けた議論を国際的、分野横断的に推進することを目的とする。

入院医療中心から地域生活中心へという流れは、世界的に見れば、医学モデルから生活モデルへのパラダイムシフトの中で生じており、不可逆と言える。しかし、このパラダイムシフトは世界各国の医療制度、社会制度などの中で、サービス提供時の量的質的に異なる課題に直面しつつ、社会問題化している。

フランスでは入院設備のある病院を中心に、地域に精神科医療サービスが生み出され、約7万人を圏域としたセクター制度が構築されてきた。近年、患者の治療と地域ケアを総合的に行うシステムが「ケアの経路」と呼称され、地域医療型のセクター制度の発展が見込まれている。しかし一見して先進的に見えるフランスにおいても、予算削減、障害者の社会的排除の問題などもあり、セクター制度は岐路に立たされている。例えば、病床削減により、緊急対応できる病床と人員の不足、入院環境の悪化、地域の医療・福祉のサービス量不足などによる待機者リスト増加のため、状況改善を求めるデモなどが頻発している。さらに、フランスでは医師が中心になり、されてきたため、就労支援などの福祉領域との連携が課題となっている。

他方、我が国では民間主導で、医師、精神保健福祉士や保健師などの専門職、さらにはボランティアや家族などのインフォーマルな力が組み合わさり、病院改革や地域での生活支援の仕組みが開拓されてきた。例えば、日本初の全病棟の開放処遇を行った三枚橋病院 (石川信義、『開かれている病棟：三枚橋病院でのこころみ』、星和書店、1979年)、谷中輝雄によるやどかりの里 (谷中輝雄、『生活支援 精神障害者生活支援の理念と方法』、やどかり出版、1996年)、作業所設立運動などが有名であり、これらの運動はイギリスのコミュニティケア運動など欧米の改革の影響と無関係ではない。

本研究では今後の日仏の地域ケア体制の構築について分野横断的、国際的な視野のもとで議論するため、両国において取り組まれた精神障害者の社会統合に向けた運動とその思想的源泉にまで立ち戻り、学際的、国際的な観点から議論を行う。フランスの改革運動の源泉の一つはラボルド病院を中心とした戦後の病院改革運動「制度を使った精神療法」(La psychothérapie institutionnelle) である。「制度を使った精神療法」の思想基盤のうえに、患者を人間として尊重する治療環境の重要性が模索され、患者を生活環境から切り離さない仕組みとしてセクター制度が構築されてきた。ドゥリオンは「制度を使った精神療法」の中心人物ジャン・ウリ (ラボルド病院前院長) と連携しつつ、リールでセクター制度の構築に努めた実践家で、数多くの著作もある研究者である。ドゥリオンをはじめとした日仏の研究者の対話を通じて、精神保健福祉の普遍的課題に立ち戻り、現状分析と課題の検討を行うものであり、精神障害者の地域ケアを切り拓くうえでの新しい知見を見出そうとするものである。

### 3. 研究の方法

研究を通じて、パリの精神保健福祉関連施設、「制度を使った精神療法」の関連病院の文献、現地調査を行う。そのために、フランスのセクター制度や「制度を使った精神療法」に関する書籍に加えて、雑誌、新聞、施設で発行されているパンフレット、年報などを収集する。さらに、現地調査では見学と施設の責任者にインタビューを行うことで制度についての理解を深め、意見交換も行い日仏の比較を行う。

申請者は精神科医の三脇康生教授 (仁愛大学)、法学者の永野仁美教授 (上智大学) らと共同で、ドゥリオンの著書『人間の精神医学のための戦い』(Mon combat pour une psychiatrie humaine, Albin Michel, 2016) を晃洋書房から翻訳出版する予定である。

出版を機に、ドゥリオンを招聘し、東京（上智大学）、京都（京都大学）でシンポジウムを行う。シンポジウムでは、ドゥリオンによる講演に加えて、我が国の研究者らと意見交換も行い、研究成果としてまとめる予定である。

#### 4. 研究成果

本研究を通じて、図書2冊、論文4本（うち1本は2023年7月掲載予定）などが成果としてあげられる。

『メンタルヘルスの理解のために』（松本卓也ら編著、ミネルヴァ書房、2020年）の「第3章 メンタルヘルスを支えるしくみ 精神保健福祉と制度精神療法」では、我が国における精神保健福祉の制度の成り立ちを示すとともに、国際的、普遍的視野に立ち、精神障害者の地域生活支援を推進するための課題、そして専門職の使命について明らかにした。「生活者 から見たわが国における精神保健医療福祉改革」（招待あり）「生活協同組合研究」, (2021.11 vol.550, 42-49頁, 2021年, DOI: 10.57538/consumercoopstudies.550.0\_4) では精神保健医療福祉改革の流れを概略し、「生活者」という言葉を手がかりにその改革史と課題を明らかにした。「生活者」の概念は1970年に野本三吉が創刊した雑誌「生活者」に由来し、精神障害者の生活支援をしていた谷中輝雄が実践に取り込んだ。障害者自立支援制度のおかげで、精神障害者の地域生活を支える仕組みは充実したものの、根強い偏見もまた存在し続けている。本稿では「生活者」の言葉に立ち返り、精神障害者の生活支援と課題を論じた。

これらの二つの成果を通じて我が国の精神保健福祉の成り立ちについて議論するとともに、精神保健福祉制度とそれを支える専門職に求められる使命について問い直すことができた。そこで浮かび上がったのは、精神障害者が地域で生活を続けるために、困難を抱える当事者の内的世界に見合った環境や制度を社会に創出することの重要性である。このことは以下の研究で、精神分析における転移という概念を発展的に用いることで研究を深めることになった。

ピエール・ドゥリオン（著）、池田真典（訳）、永野仁美（訳）、野崎夏生（訳）、三脇康生（訳）『人間の精神医学のための闘い - 発達障害の専門家は語る -』（翻訳）（晃洋書房、2022年、ISBN978-4771036659）はPierre Delion “Mon combat pour une psychiatrie humaine” Albin Michel, 2016, Parisの邦訳である。申請者は第6, 8, 9, 10, 12章を担当した。同書は、リール第2大学名誉教授ドゥリオンの精神科医としての職業人生を振り返った著作であり、制度を使った精神療法の実践の記録でもある。本書ではフランス精神科医療の制度的な面における医療改革と、心理療法や薬物療法に並んで、施設環境やコミュニティなどの制度を治療の道具として活用する制度精神療法との関わりを事例や当時の証言など解き明かす内容となっている。とりわけ、病院改革運動「制度を使った精神療法」（La psychothérapie institutionnelle）に対し、「統合困難な治療装置を使う精神療法」という訳語を用いることで、この実践の特色を表すことができた。環境を治療的に用いるということは、自閉症、統合失調症など主体が生きることができるといえる世界に合わせて制度や環境を変えていく、ということであり、そこでは特異で、個別的な形で作用する転移の扱いが治療的に重要となる。

翻訳とドゥリオンとの招へいによる対話を通じ、改めて精神障害者と共生する社会の構築のために、フランスの精神保健福祉の歴史と課題を問い直した。以下の2本の論文ではフランスにおける精神保健福祉の歴史とその課題を俯瞰的に振り返り、他方ではその仕組みの一つに焦点をあてて事例を取り上げた。

「フランスのセクター精神医療の改革史からみた精神障害者リハビリテーションの特徴と課題」（査読あり）（「精神障害とリハビリテーション」第27巻第2号、2023年）ではセクター精神医療の歴史を振り返るとともに、時期を3つの時期に分類した。第1期は1960年のセクター精神医療の誕生である。第2期は85年のセクター精神医療の法定化に始まり、86年以降のセクター精神医療の拡充期が相当する。第3期は2000年代以降のセクター精神医療の改革期である。第1期と第2期については、セクター精神医療の概要に関してJaeger, Mの文献、セクター精神医療の変遷についてMassé, G, Bauduret, J-Fを参照した。第3期の改革の中で概念化されてきた「経路」の解説については、Bloch, M-Aらの著書、保健医療福祉能力開発局（ANAP: Agence Nationale d'Appui à la Performance des établissements de santé et médico-sociaux）の報告書を参照した。また、改革の中で生じている課題については政府報告書や新聞記事も引用した。さらに、申請者は上智大学の永野仁美教授を代表とする「日仏伊芬における精神保健政策の比較研究 - 地域精神医療の実践を目指して -」の研究チームに参加し、2018年度に三菱財団の助成を受け、パリの就労支援施設（ESAT: Établissement et Service d'Aide par le Travail）とボルドーの地域圏保健局（ARS: Agence Régionale de Santé）で2019年6月に調査に赴き、責任者にイ

インタビューを行った。この成果も盛り込みつつ、セクター精神医療の現状と課題について考察を加えた。

「フランスにおける精神障害者を対象とした家庭受入制度の治療的役割とその課題について」(査読あり)(「精神科治療学」第38巻7号、851-860頁、2023年)では地域の精神科医療の選択肢の一つである精神障害者の家庭受入(L'accueil familial)のサービスについて概説した。家庭受入とは、精神障害者を家庭に一定期間受入れ、病院の作成した治療計画のもとで、治療の一翼を担い、生活支援を行うサービスである。本稿ではその概要を示すとともに、統合失調症で長期入院をしていた患者の事例を参照したうえで、家庭受入の役割と課題についての考察を行った。家庭受入については、わが国の里親制度に類似しているものの、定訳が存在せず、このサービス本来の趣旨などが伝わってこなかった背景がある。本稿では事例に踏み込んで、家庭受入制度の内容や課題について考察し、臨床的にどのような意義があるのかを示している。本稿では日本の里親制度と相違し、あくまでインフォーマルな資源でありつつも、職業的にも自立している家庭受入サービスの概要を示すとともに、精神科治療という観点から転移という概念に着目し、この制度にどのような役割と課題があるのか議論した。

これらの論文を作成する中、2022年9月にピエール・ドゥリオンを招聘し、シンポジウムを開催した。とくに、京都大学では現役の大学院生、教員らと質疑をする時間もあり、ドゥリオンの実践の意義、それを支える思想について内容を深めることができた。来日時の質疑、その後の対話を通じ、申請者は転移の概念に着目した論文を執筆した。以下の論文は2023年7月に掲載予定である。

「Pierre Delion との対話によるセクター精神医療の治療的、制度的課題の検討」は「臨床精神病理」に掲載予定であり、転移をめぐる関係の中で、どのような治療作用が起きているのかについて明らかにしたものである。ドゥリオンによると、患者を中心に、治療者、福祉関係者、家族などが密接な関係を築き上げることが可能な範囲を単位とし、転移の星座のような治療組織が立ち上がる。それは病気や障害によって自動化され、オートマトンの転移が稼働する枠組みと理解できる。重要な点は、この枠組みがいわば基礎となり、それぞれの転移に応じた形で、偶然的作用によって捉えられる事象について検討が可能となり、治療の新しい局面が展開されることである。この転移の働きを内側に働かせているのが、ドゥリオンのいう「治療の継続性」であり、セクター制度はそうした原動力をもとに患者の周囲に緻密に制度展開されてきた。しかし、フランスでは急激な病床削減が行われ、セクター自体の統合も推し進められる中で、転移を働かせる治療環境を維持することが難しくなりつつある。セクター精神医療の制度は残っても、治療上の変化をもたらすことが困難になることが、ドゥリオンとの対話を通じて明らかになった。

このような研究成果によって、今後の研究課題も明らかになった。つまり、精神分析でいう転移が、施設環境との関係でどのように展開し、ケアの質向上に寄与できるかという点を、今後は明らかにしていきたい。

申請者は2023年11月26日の日本ラカン協会にシンポジウムに招へいされた。その際に、同じシンポジストのアラン・ヴァニエ(精神科医、パリ第7大学教授)と対話し、パリ郊外にあり、児童を対象としたデイホスピタル、グループホームを運営するボンヌイユにおけるケアの意義にも関心を向けることになった。そのことはこれまでの転移に関する議論を深めて、家族と施設、そして社会をつなぎ、施設内に閉じない形で、精神障害をもつ人たちのケア体制を構築することの重要性を認識させることになった。

今回の研究を通じて、日仏で新たな研究者との人脈を形成することができ、従来の精神分析の理論を転移の概念を様々な角度から読み直し、施設における実践につなげるという研究の視座が生まれた。

フランスにおいてセクター制度は岐路にあり、セクター統廃合の動きが本格化している。この結果として、精神障害のある患者やその家族と人間的な配慮に基づいた関係性を維持することが困難になる状況も生じつつある。

今後は本研究で明確になった課題を掘り下げ、厳しい状況においても、精神障害の治療において本質的なもの、治療者や家族、地域の人たちなどとの人間的な関わりにおいて生じる治療の進展を、どのように裏付け、支えることができるか、そこに精神分析の知見がどのように寄与できるかについて研究を継続する。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 池田真典	4. 巻 550
2. 論文標題 「生活者」から見たわが国における精神保健医療福祉改革	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 生活協同組合研究	6. 最初と最後の頁 42-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 池田真典
2. 発表標題 精神分析との関連からみたフランスのセクター制度改革とケアの継続性
3. 学会等名 日本精神病理学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 池田真典
2. 発表標題 フランスにおける地域精神保健福祉の動向と経路の概念について
3. 学会等名 精神障害者リハビリテーション学会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 ピエール・ドゥリオン（翻訳：池田真典、永野 仁美、野崎 夏生、三脇 康生）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 晃洋書房	5. 総ページ数 258
3. 書名 人間の精神医学のための闘い - 発達障害の専門家は語る -	

1. 著者名 松本 卓也、武本 一美	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 300
3. 書名 メンタルヘルスの理解のために	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 ピエール・ドゥリオン来日講演・シンポジウム(22年9月9日京都大学、9月11日上智大学)	開催年 2022年~2022年
--	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------